

---

# 俺と自称関西人

津風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と自称関西人

### 【Nコード】

N0704N

### 【作者名】

津風

### 【あらすじ】

連載中の「僕と彼氏と兄二人」の妄想サイドストーリー。

酒を飲んでも酔わない浩美は酔っ払っている友一へキスを迫り。

ありえない妄想BLです。本編とは全く関係ないです。

## （前書き）

連載中の「僕と彼氏と兄二人」の妄想サイドストーリー。  
浩美と友一のBLな関係。微妙にえっちいので注意。

ごめんなさい、主役よりも脇役大好きなんです。

「あ、だめ……ボク、もう……」

ぱたつと気を失うキオ。愛斗はそんな彼に毛布をかけてやる。

「キオって、酔うとすぐに寝ちゃうよね」と、笑う。

俺はビールを飲み干してから答える。

「弱いんだよな、キオは」

「まだ全然残ってんだけどなあ」

と、虚ろな目で友一も言う。

愛斗はテーブルの上を簡単に片づけると、欠伸をした。

「あれ、僕も眠いかも……」

そしてぱたりとキオの隣へ倒れ込む。彼もまたアルコールに弱い。

「お？ 何や、愛斗も眠ったんか」

このメンバーの中で唯一酒に酔わないのは俺だけだった。

「友一、お前も寝たらどうだ？」

「ああ？ 俺はまだいけるわ！」

完全に酔っ払いである。

「静かにしろ。もう夜中の一時だぞ」

「知らん」

と、また缶に口を付ける。

四人で酒を飲むのは三回目だった。キオが眠ると後を追うように愛斗も眠る。友一は飲み過ぎて吐いたり、二日酔いになる。それがいつものことだった。

「あんまり飲むと、また吐くぞ」

「知らん」

友一はそう言って缶の中身を飲み干した。度数が低いので大丈夫だとは思うが、さすがに今夜は飲み過ぎだ。

「……なあ、友一」

「ん？」

「キスしていい？」

真顔で俺が尋ねると、自称関西人は目を丸くした。

「は？」

「だから、キス」

顎を取れば、友一の酔いが醒めていく。

「ひ、浩美、何言ってるんだし」

動揺しているのか、口調は東京弁に戻っている。

「嫌か？」

「あ、当たり前だろ！」

逃げ出そうとする友一を床へ押し倒す。

「静かにしろよ。二人が起きちゃうだろ」

と、俺はすーすーと寝息を立てる可愛い奴らを見る。

「な、ちょ……」

逃げ場を失った友一が口を閉じたまま顔を背ける。

「悪いんだけどさ、人って外見じゃないと思うんだ」

「い、意味分からん」

「キオも愛斗も可愛いんだけど、やっぱりお前の方が何倍も良いな  
て思うんだ」

「……」

「つつーか、お前のその、普通なところが愛おしい」

「ふ、普通って言うな！」

自称関西人は普通の人間だ。生まれは大阪らしいが一歳になる前に東京へ越してきて、以来ずっと東京で育ってきた。両親は純粋な東京人だが、彼はそれを何故か嫌っている。

「褒めてるんだから良いだろ？」

「ど、どこがだよ」

いつもと同じ反応を見せる自称関西人。

「だから、俺はお前が良いんだよ」

覚悟を決めたのか、俺の顔をじっと見つめてくる。そっと顔を近

づけていくと、友一の身体が抵抗を始めた。

「どっちなの？」

ギリギリのところでもう尋ねると、友一の目が潤んでいた。

「こ、こわい……っ」

「何が？ 俺が？」

首を横に振って、言う。

「ひ、浩美と、そーいう関係になるの、が」

どうやら、彼はまだそういったことに不慣れなようだ。そういえば、まともに付き合った彼女も数人だと聞いたな。

「心配するな、隠し通せばいいだけだ」

と、俺は今度こそ彼の唇に口づけた。両目を閉じた友一は愛らしくて、俺もまた目を閉じて感じる。

唇を離すと、友一は言った。

「……う、上手いな、お前」

照れているのか、顔が赤い。

俺はにつこり笑うと、友一の頬を軽く撫でた。

「もう一回、するか？」

「……んなこと、思ってるはず」

素直じゃない彼の唇を塞いで、先ほどよりも濃いキスをする。

全身を強張らせていた友一は、やがて俺へ身体を預けるように緊張を解いた。

「ん……あ、やめ」

キスの寝言で目が覚めた。

いつの間にやら眠ってしまったらしい。すぐ近くでは友一が俺の腕を枕にして眠っていた。

「……ああ、そうか」

結局、友一はキス以上のことは許してくれなかった。だから一緒に眠ろうと言ったのだが、友一に腕を貸した覚えはない。

見ると、彼は幼い寝顔が無防備にさらしていた。安心しきった顔

である。

「友一」

名前を呼んでも目を覚まさない。

眠りに落ちる前に二人で交わした答え合わせは、意外とあっさりしていた。

友一は、普通と違う俺と友達以上の関係になれるはずなんかない、と思い込んでいたのだ。そんなこと知らなかった俺は、とりあえず愛の言葉を囁いた。

一応、それ以上の関係になったわけだが、この関係はいつまで隠し通せるだろう？

ふと浮かんだ疑問を、俺はすぐにかき消した。

どちらにしても、今が幸せならそれで良いのだ。

（後書き）

本編とは全く関係ありません。  
完全なる作者の妄想の産物です。  
ちなみにキ才は単体萌えです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0704n/>

---

俺と自称関西人

2010年10月9日01時06分発行